

です。繰り返しますが、これから最も必要になる能力は人間交渉能力でしょう。それと、男と女の関係能力です。いずれの能力もこれまでの学校教育が苦手としてきた世界です。学校に代わってマンガの世界が培ってきた能力です。

これが、一番最初にマンガを読まずに勉強のみしている子どものほうが心配だった理由です。

もちろんマンガも所詮はメディア。子どもたち自身がつくる世界ではありません。マンガという閉じた世界ではなく、子どもたちが少々の危険というコストを払ってでも、大人の目が届かない場、互いに学び合い教え合える世界をいかに用意できるか。それが少年ジャンプ六〇〇万部を通じて、あるいは一〇〇〇万部以上のマンガ雑誌全体を通して、子どもたちが私たち大人に要求していることであると考えます。

もしこのメッセージの意味を読み間違えると、少子化が益々進行し、日本の豊かさは根元から折れてしまうことを強調して第一部を終わります。

## Ⅱ 新しい親子の世界

この記事と関連して、半年後の平成九年（一九九七）一月一日の日本経済新聞朝刊に次のような見出しができました。

再び新聞記事を紹介することから始めたいと思います。  
「出生数また減、最低に」  
昨年（一九九六）七月七日朝刊（朝日新聞）一面トップの見出しです。  
前年に生まれた子どもの数が百十八万七千六十七人にとどまり、現在の統計方法が導入された明治三十二年（一八九九）以来最低になった、との内容です。既に紹介したように、一人の女性が生涯に産む子どもの平均人数（合計特殊出生率）も史上最低の・四三に下がり、人口全体に占める子どもの比率が主要先進国の中で最低になったとの解説もありました。

### (1)子ども同士の豊かな関係を

再び新聞記事を紹介することから始めたいと思います。  
「出生数また減、最低に」

昨年（一九九六）七月七日朝刊（朝日新聞）一面トップの見出しです。

前年に生まれた子どもの数が百十八万七千六十七人にとどまり、現在の統計方法が導入された明治三十二年（一八九九）以来最低になった、との内容です。既に紹介したように、一人の女性が生涯に産む子どもの平均人数（合計特殊出生率）も史上最低の・四三に下がり、人口全体に占める子どもの比率が主要先進国の中で最低になったとの解説もありました。

## 出生数 120万人台に増加

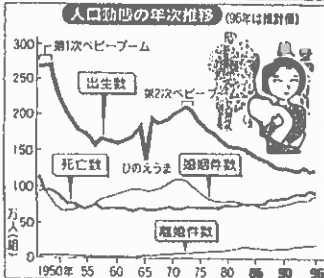
### 第2次ベビーブーム 世代が産産時期入り なお少子化傾向

一九九六年は前年（一九九五年）に比べて、出生数が一八〇万人台に増加した。これは、一九九五年に比べて、出生数が一七〇万人台に減少した。出生数は、一九九五年に比べて、出生数が一七〇万人台に減少した。出生数は、一九九五年に比べて、出生数が一七〇万人台に減少した。

96年の厚生省人口動態統計

## 離婚は最多20万組

一九九六年は初めて、前年を二万人超え、二十万組を超えた。これは、一九九五年に比べて、出生数が一七〇万人台に減少した。出生数は、一九九五年に比べて、出生数が一七〇万人台に減少した。



出生数は、一九九五年に比べて、出生数が一七〇万人台に減少した。出生数は、一九九五年に比べて、出生数が一七〇万人台に減少した。出生数は、一九九五年に比べて、出生数が一七〇万人台に減少した。



りになった」と述べるとともに、厚生省人口問題研究所の「九二年の見通しより実際は、一生結婚しない女性の割合が高まり、結婚した夫婦間の子供の数も減少傾向が続く」という見解を紹介し、「少子高齢化が加速度的に進みかねない状況だ」と結んでいます。「九二年の見通し」というのは、第一部で紹介した《図―1》の(3)「二〇二五年の人口予測」のもとになった推定データです。

子どもの減少がこれほど繰り返し大きく取り上げられる理由、あるいは少子化が生じた原因については、既に第一部で論じま

「出生数120万人台に増加

第2次ベビーブーム世代が出産時期入り  
なお少子化傾向」

前年（一九九六）に生まれた子どもが百二十万三千人で、過去最低の九五年を上回ったというのが前段の見出しの内容です。しかし、「第二次ベビーブーム世代が出産時期にさしかかったことによる増加に過ぎず、出生率を押し上げるほどではないとみており、少子化傾向には歯止めが掛かりそうにない」とも付け加えています。その理由は、出生数は前年より一万六千人増えたが、人口が増えているため、出生率（人口千人当たりの出生数）は「過去最低だった九三年、九五年に並ぶ九・六にとどまる見込み」とありました。これが中段と後段の見出しの内容です。

さらに本文中で「1・42人に下方修正」という中見出しを付けて、厚生省が九五年の合計特殊出生率の値を一・四三から一・四二に修正したことを伝えています。加えて、「日本の少子化傾向が、当初考えられていたより一層進んでいることが浮き彫

した。それにもかかわらず、ここで再び少子化の現状を取り上げたのは、二つ理由があります。その一つは、これから述べます第二部の課題です。今と未来に生きる子どもたちに、一人の親として、また大人として、具体的なかわり方を考えるために、少子化の推移にいつも関心をもっていたきたいからです。なぜか。これが二つ目の理由ですが、日本の少子化は、子どもの自立にとって非常に困難な課題を提起しているからです。

子どもが自立するために最も必要なのは、大人の手でも学歴でもお金でもなく、同じ年の仲間や少し年の違う先輩や後輩です。

大人の目と手を離れて、互いに「学び合い、育ち合い、教え合う」ことによってこそ、一人の人間として生きる力を培えるからです。ところが、少子化はこのような世界を子どもから奪ってしまいます。おまけに両親と二組の祖父母により、愛情と財布の中身が過度に与えられがちです。

その意味で、少子社会で子どもがたくましく育つための課題は、家庭の中の子どもの数や育て方ではなく、家庭の外の子どもたちの互いの関係の豊かさです。いいかえれば、少子社会における子育ての最も重要で困難な課題は、いかに親も含めた大人が手を引くか、ということなのです。

このことを私に気づかせてくれたのが、私の四人の子どもたちです。

実は、私は一人っ子として生まれ育ちました。家は貧乏でしたが、当時としてはさまたまな意味で恵まれた子ども時代を過ごせたと思います。この点では、心から感謝しているものの、他方で、兄弟姉妹のいない寂しさ（わがまま？）を自分の子どもには味わわせたくない、との思いももつようになりました。これが少子時代に抗して次に紹介する二男二女の父親になった理由です。

長男 昭和五十二年（一九七七）十二月十六日生まれ

長女 昭和五十六年（一九八一）八月二日生まれ

次男 昭和五十八年（一九八三）五月十一日生まれ

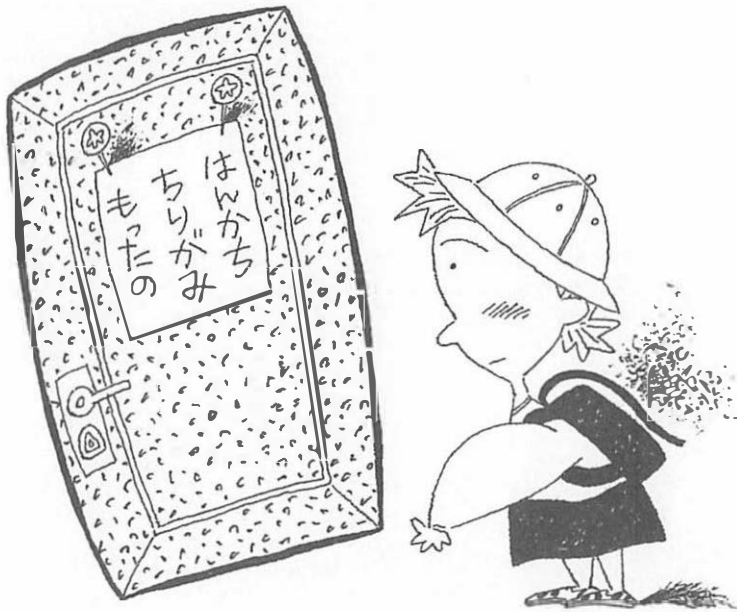
次女 昭和六十年（一九八五）四月十七日生まれ

(2)変化する「学校のモノサシ」

この言葉の意味はいうまでもなく、ハンカチとティッシュペーパーを学校に持つていくことを忘れないように、ということですね。なぜこんなことが重要と思われる方も多いでしょう。実は問題は次女ではなく上三人の入学時にありました。

まず長男の場合、だれに似たのか（妻の説では私）、口は達者で人気者ですが、初めて持ち帰った通信簿の基本的生活習慣は△印がいっぱい。その理由を聞いても返つ

はんかち ちりがみ もったの



もつとも、このような私の思いは、今のところ理解されていないようです。数の多さは熾烈な競争と悲鳴の温床、互いに支え合う愛に目覚めて親の苦勞に感謝する日がくるには、時間がかかりそうです。

しかし、このように切磋琢磨（格闘？）する四人の世界は、少子社会の教育課題を研究する私には、貴重な発見の宝庫です。

四人は子どもたちが互いに「学び合い、育ち合い、教え合う世界の不思議さ」を教えてくれる先生です。その先生が語った珠玉（？）の言葉の中から、私が研究者として発見し、父親として学んだことを紹介しながら、少子社会に人の子の親となる課題を考えてみたいと思います。

(2)変化する「学校のモノサシ」

まず最初は、末っ子の次女が小学校入学直後に玄関のドアに、私が貼った言葉です。

てくるのは「ばく知らない」。親として、元気だけが取りえの子どもと思うしかありませんでした。

ところが、四歳下の長女の入学により理由がわかりました。帰宅するやいなや「お母さんのせいで叱られたのよ！」と妻に叫んだからです。チリガミ、ハンカチを持たずに登校し先生に注意された長女は（ここまでは長男と同じ）、持たせなかったお母さんが悪いと妻を責めたわけです。

長女は自分が良い子であることが当然と思っている子。ただし、親の手を借りなければ何もできない子でもあります。

「あなたが可愛がりすぎたからよ」……これが妻の言い分です。

問題はハンカチ、チリガミです。不覚にも私も妻も、毎朝持ち物の検査があることを知らなかったわけです。二人とも一応は田舎の優等生でしたが、服の袖を鼻汁で光らせた子どもでもありました。そのため、チリガミ、ハンカチが学校にとってどれほど重要かを想像できませんでした。『学校という世界のモノサシ』が変化しているこ

とを長女の言葉が教えてくれたわけです。その結果わが家の教育はどうなったか。

### (3) 親の役割は「モノサシの発見」

これまで、長男が初めて持ち帰った通信簿の基本的生活習慣の欄が△印であったこと。その原因が、私たち夫婦の子ども時代と異なり、持ち物を細かく検査する学校のモノサシの変化にあることを、長女の言葉で知ったことを紹介しました。

このような学校の変化に、上二人をうまく適応させられなかった妻は、三人目の次男には、失敗を繰り返すまいと決意したようでした。そのため、つとめて何でも自分でできるようにしつけようと思いました。その結果、次男はハンカチとチリガミを忘れなかったでしょうか。

子育てはそれほど甘いものではありません。努力はするのですが私に似て不器用な次男は、自分でやろうとすればするほど失敗ばかり。それを見て益々いらだつ妻の声

ようです。

といつても忘れることは避けられません。そこで考えたのが、先に紹介した入口のドアに「はんかち ちりがみ もったの」と書いた紙を貼ることでした。

顔をみればメンデルの法則の見本のような四人ですが、性格は全く別。基本的生活習慣に遺伝子の力は及ばないようです。

同じ親のもとに生まれ育った子どもでも、これだけ違うわけです。まして、学校の教室に集まった子どもたちは、親も家庭もすべて異なります。それを、一人の教師が、同じ教科書で、同じ時間に、同じ規則のもとで教えることがどれほど大変なことか。手のかかる四人の子の親として、先生方に心から感謝します。

さらに、それは子ども側の側から見れば、一つのモノサシで評価されることがいかに理不尽なことか、ということでもあります。このことは学校の問題のみではないと思います。私たちも親として、育児書やマスコミによる理想的な子ども像によって、自分の子どもの性格や成長を評価していないでしょうか。

が、毎朝、部屋中に響くのみでした。  
このように呑気な長男、わがままな長女、要領の悪い次男の姿を見ながら育ったのが四人目の次女です。どうすれば叱られないかを、知らず知らずのうちに身につけた



いかにその子にふさわしいモノサシを見いだすことができるか。これが、親の役割であることを、次女の言葉は教えてくれました。

#### (4) どんどん変わる子どもの能力

これまで、四人の子どもたちの性格の違いについて紹介してきましたが、その差は学校の勉強にも現れるようです。それを教えてくれたのが、次男が小学校二年のときに発した次の言葉です。

一分たったら教えて

仕事を終えて夜八時頃帰宅した私に、次男がストップウォッチを差し出して語りかけてきたのです。私は何のことかわからないままに、ストップウォッチを受け取りス

イッチを押ししました。すると、次男はもう一方の手にもっていたカードをめくりながら、「ニイチガニ、ニンガシ……」と猛スピードで言い始めたのです。掛け算の九九の練習でした。

私は驚きました。先に紹介したハンカチとチリガミと同様に、この九九の暗記においても、上二人には苦勞したからです。実は長男と長女いずれも小学校二年の秋から暮れにかけて、毎晩風呂に入れながら九九を覚えさせるのが、父親としての私の役割でした。

しかし、長男が全部言えるようになったのは、努力のかいなくクラスでビリから二番目。長女は少し早かったものの、自分より遅い人が少ないことには変わりありませんでした。

ところが次男は自分で努力しているわけです。

子どもが自立するように、との妻のしつけの効果がやっと現れてきたと喜んだのですが、ことはそれほど単純ではありませんでした。妻の話によると、家庭では兄と姉



しばらくぶりに出会った知人の子どもの大きさに驚いた経験のある方は多いと思います。逆に、人から指摘されて初めて自分の子どもの成長に気づいた方も少なくないのではないのでしょうか。毎日顔を合わせることで、かえってわが子の成長の節目を見逃すことがあるようです。特に、父親の場合は鈍感になりがちです。私も例外ではありませんでした。

どうも学校の勉強で測れるのは、子どもの能力のほんの一部のようです。それも背丈と同じようにどんどん変わります。そのため、わが子にふさわしいモノサシは一つでは足りません。おまけに、次々と新しい目盛りが必要になることを忘れないでいたものです。

### (5)「反抗」は正常な成長の証拠



のいじめと妻の叱咤にいじけるドジな次男も、教室では優等生。それも、ガリ勉タイプではなく、元気いっぱいハツラツリダー。その面子にかけても九九暗記で一番になりたかったとのことでした。私には、「家と学校に異なる次男がいる」としか思いませんでした。いうまでもなく、どの子も間違いなく私と妻の子どもです。でも小学校の成績は次男が上でした。ただし今年入学した長男の大学での専攻は基礎工学、数学が得意だからです。逆に次男は中学の数学にとまどっているようです。

このことを教えてくれたのが次の長女の言葉です。

ちゃんとズボンをはいてください

長女が小学校五年の夏のことでした。風呂あがりには、いい気分を下着姿のまま涼んでいた私に向けた言葉です。

その語気の鋭さに驚く私の耳元で、妻が「レディの前で失礼よ」とささやいてくれました。娘はいつのまにか私が入っていけない世界にいました。

一人の女性として扱われるからこそ、女性として生きることができません。一人の間として扱われるからこそ、自立への道を歩むことができます。

思春期にある者に、子どもという見方や考え方でかかわることへの疑問符を、長女の言葉は教えてくれました。

さらに長男の次の言葉はより厳しいものでした。

そうやってきめつけるからできなくなるんだ

長男が中学校三年、次男が小学校三年の冬休みのことでした。高性能の組み立て式リモコンレーシングカーをほしがる六歳下の次男に、できるわけがないと決めつけた私に対し、語気鋭く言い放った言葉です。

そこには、私の知っている楽天家の男の子に代わって、父親の理不尽な言葉を拒否し、弟の自立を助けようとする一人の若者がいました。

もし、私が二人の言葉を子どものくせにと一喝すればどうだったでしょうか。二人は内心では反感をもちつつも、私の前では子どもを演じ続けるが、男と女として生きる場を別の世界に求めるようになり、私は益々二人の成長を知る機会を失う、という悪循環におちいったはずです。

思春期とは男の子と女の子が「男と女」として自ら立つために、自分を育んでくれ

た温かい世界を捨てようとかあがく時期といえます。その第一歩が親の庇護から自由になることです。その意味で、思春期真っ盛りの中学生が親に反抗するのは、むしろ正常に成長している証拠と考えます。

問題は親の離れ方です。

子どもを測るモノサシを捨てる時がくることを、大きな驚きと少しの寂しさとともに、長男と長女が教えてくれました。蛇足ですが、父親の呪縛じゆばくから解放された次男は、長男の助けを得ながらではありませんが、見事にレーシングカーを組み立てたことを付記しておきます。



## (6)創造し続けよう“親子の関係”

家庭教育とは、一言ひとことでいえば自分の子どもをどのように育てるか、ということだと思います。その前提には、こうあってほしいという親としての子どもの理想像があるでしょう。したがって、家庭教育にとって最も大事なことは、子どもの理想像の描き方です。

たとえば、どこかに理想的な子ども像や子育ての方法があり、それを知ることが親としてのあるべき姿と想っている方がいないでしょうか。マスコミで報道されるさまざまな子どもの問題を基準にして、自分の子どものあり方を判断している方はいないでしょうか。学校の成績に基づいて、自分の子どもの未来を評価している方はいないでしょうか。

私が四人の子どもたちから学んだことは、子どもが成長するということは、親が描



でしょうか。

親である私たちがわが子と共に成長し、子どもを見る目や子どもへのかかわり方のモノサシをいつも変化させようとしているかどうか。いいかえれば、子どもとの間<sup>あいだ</sup>

く子ども像を次々と破って、そこからはみ出ていく、ということでした。

家庭ではドジで失敗ばかりでも学校ではヒーローの次男のように、自分を表現する世界の変化に応じて全く異なる姿を示すのが子どもです。要領のよい次女のように、自分でも意識しないままにさまざまなことを学びとっているのが子どもです。

さらに、まえに紹介した長男と長女のように、親の子ども像を拒否することこそが、一人の人間として自立するための条件のほうです。

このことは、よき親であろうとすることが、かえって子どもの成長を止めてしまう可能性がある、ということでもあります。子どもは日々成長し、さまざまな場で多様な姿を現しているはずです。

それは一人の人間として生きるための準備をしているといえます。

しかし、そのことに気づかず、可愛いわが子のために、うちの子に限って、まだまだ子どもよ、私がいなければ何もできないのよ……、と思いついていないでしょうか。親の期待に答えて、「可愛い○○ちゃん」であり続けることを、強制していない

のあり方”を創造し続けているかどうか。これが未来を生きる子どもたちに対して、過去と現在を生きる親がとるべき責任と考えます。

子どもはいい子であればあるほど、親が成長しなければ、親の願う過去の自分の姿を演じ続けなければなりません。

子どもの自立を妨げているのはだれなのかを、改めて問い直してみてください。

## (7)懸命に生きる姿のモデルに

「アーア……今日は大変だったのよ、襖ふすまを破るは、物は投げるはで」

「そうか……、いよいよ始まったか」

長男が中学一年の冬のことでした。研究室で原稿を書き上げ、夜十一時頃帰宅した私に、待ちかねたように語りかけてきた妻との会話です。

思春期真っ盛りの男の子がいる方は、何が起こったか想像できると思います。長男

が夕食の後、自分の部屋で宿題をしていると思っていたら急に暴れだし、手がつけられなかった、ということでした。

何が起こったのかわけがわからない、と妻は嘆きましたが、男の私には覚えがありました。中学時代に同様のことで母や祖母を困らせたからです。

そのため、「大丈夫だよ、正常に成長している証拠だから」と妻には強気でいったものの、内心はとまどっていました。わが家の家族構成や居住環境を考えれば、単純に私の子ども時代の経験を当てはめることができなかつたからです。

一人っ子の私の場合、母と祖母はひたすら嵐が過ぎ去るのを待ったようです。ただし、他の人に迷惑をかけることはありませんでした。

でも現在の家族は親子六人、それも三部屋しかない官舎での生活です。長男の暴発は、他の三人の子どもの生活に直接影響します。長男の顔色のみで動くわけにはいかないわけです。

そこで夫婦で話し合っ出て出した結論は、私が大学ではなく家で仕事（原稿執筆）を



することでした。

思春期とは、それまで子どもとして育てられた世界を一度否定して、一人の人間として自立するために、改めて自分らしさ（アイデンティティ）を求めてあがく時期といえます。その過程は、男の子が男に、女の子が女に成長するために、噴出する性的衝動にとまどうことでもあります。

そして、この時期に良くも悪くも母親は女性の、父親は男性のモデルになります。ところが、もし父親が仕事人間で家庭を顧みる余裕がなければどうなるでしょうか。子どもは最も身近な男性のモデルを見失うことになってしまいます。

私はたとえ仕事の効率が落ちても、父親の役割を果たすのは、今においてはしないと考えました。

男の子が男になるために、思春期特有の感情にとまどう長男に対して、仕事をする姿を見せることにより、父親である前に一人の人間（男性）として懸命に生きるモデルになれることを願ったからです。

### (8)互いの違い認め秩序づくり

思春期特有の感情にとまどう長男に対して、一人の人間（男性）として懸命に生きるモデルになることを願い、仕事（原稿執筆）場を大学の研究室から自宅に移したことを紹介しました。その結果わが家に平和は戻ったでしょうか。

現実の厳しさは私の予測をはるかに超えていました。

いざ仕事を始めてみて困惑しました。大学の先生といっても所詮は公務員です。

この時期は、三LKの官舎の中に中一の長男、小三の長女、小一の次男、幼稚園年中の次女に私と妻が生活していました。この家族構成の中で仕事をすればどのような雰囲気になるかを想像してみてください。

結局は、妻と子どもたちの叫び声の合唱に、「うるさい、仕事にならん！」という私の怒鳴り声が重なっただけでした。

しかし、どんなにうるさくても締切りは待つてくれません。原稿が書けなければ収入が減り、生活がなりたたなくなりません。そのため、再び妻と話し合い、子どもたちと相談することにしました。そして、(私の一方的要求の面もありましたが)次のようなルールをつくりました。

まず、騒音のもとになるテレビに対して次のルールを決めました。

“見る番組は自由、見る時間は制限”

“一日一時間、夜八時以降は土曜日だけ”

そして、四人それぞれ一週間に見る番組を申告させ、テレビの横に貼りました。

次に、私の仕事と長男の勉強に必要な静かさを確保するとともに、子どもたちが自分で起きることができるよう、小学生は九時半、幼稚園児は九時まで寝ることを原則にしました。

さらに、家族の中の役割を明確にし、長男は風呂の用意、長女は食事を運ぶ、次男は食後の片づけ、次女は玄関の靴の整理を分担しました。

そして、起きたときと寝るときは必ず挨拶することを約束しました。

いずれのルールも、私の仕事の邪魔になる騒音を減少させるため、という生活の必要に基づく家庭内の秩序づくりが目的です。子どもの“しつけ”のためにわざわざつくったものではありません。

ただ、この機会に生活の中の時間や役割を自分でコントロールできる力を子どもたちが身につけてくれれば、という思いもありました。

もともと、実際には、私の仕事あるいは妻や子どもの都合で破られる日も少なくありませんでした。しかし、少なくとも親子六人が互いの違いを認め合いながら、自分

がしなければならぬ(したい)ことを狭い部屋で行うために必要なルールを、何とかつくってきたことも事実でした。

### (9)情報を共有、役割を明確化

長男の思春期を契機に、私が家庭で仕事をしようになったことにより、家族六人が狭い官舎で生活するためのルールがつけられたことを紹介しました。

しかし、読者の中には、「大学の先生だからできるのよ、民間のサラリーマンの家庭ではとても無理よ」と思われた方もおら

れるでしょう。確かに、わが家と同様の問題が生じた場合、私のような方法で対処できる方ばかりではないと思います。

でも、どんなに仕事が忙しいお父さんやお母さんでも、親として子どものことを知ろうとする意欲はもてるはずです。本当に子どもが親である自分を必要としていると判断したなら、その方法はさまざまでも、何とか応えようとするはずです。これが新たな生命をこの世に創造した者、すなわち人の親として生きる者の原則と考えます。

問題は家で仕事ができるかどうかではありません。子どものいまを知らうとする「意欲」と自分の出番を見逃さない「センスと判断(決断)力」です。

しかし、それでもなおそんな余裕も時間もないといわれる方もおられるでしょう。実は私がそうでした。

昼間は講義や会議等で振り回され、やっと静かに考えられるのが夜の九時、そこから原稿を書き始めて夜中にわが家に帰る、という生活を続けていました。親子六人が生活できるために稼ぐこと、これが私の役割と考えていたからです。





その私が長男の思春期を契機に生活の転換を決断できたのは、夫婦の間に次の約束があったからです。

- ① 親として子どもに関する情報を共有する
- ② 父母として互いの役割を明確にする
- ③ 夫婦として語り合う時間を毎日とる

まず、日々成長する子どもの変化を知ることが、親として責任を果たす第一歩。次いで、父と母として子どもへのかかわり方の原則を明確にすること。

わが家の場合、「日々の生活に必要なルール」の学習は妻の役割です。

そして、「命と差別と金銭」に関することを教えるのが私の役割です。この三つは人間として社会で生きるための「基本原則」だからです。

これに長男のおかげで仕事の世界と「多様な人が共に生きるためのルールづくり」

が加えられました。

そしてこのいずれもが、毎日、子どもたちが寝た後に、夏はビール、冬は熱燗を飲あつかんみながら夫婦で話をする、という習慣の中で培われたものでした。

## (10)それぞれの家庭に独自の形

「先生はやはり父親は厳しく、母親は優しくあるべきとお考えですネ」

これは、子育てに関する講演会で、何か質問はありませんか、と私が呼びかけたところ、年配の男性が語りかけてくれた内容です。

前節で紹介した、①子どもの情報を共有し、②父母の役割を明確化し、③毎日語り合う、という私たち夫婦の間の三つの約束について話したあとでのことでした。

私はとまどいました。この三つの約束を決めた目的は、あくまで父親が仕事を理由に子育てから逃げないことであって、父と母の役割を固定的に考えることではなかつ

まず、先に紹介したように、妻が日常生活に必要なルール、私が「命」と「差別」と「金銭」に関する社会的ルールの学習を分担しています。理由は二つあります。その一つは、ルールによって学習の仕方が異なることです。もう一つは、家庭の中と外ではルールの内容が異なることです。たとえば、ご飯の食べ方や言葉遣いなどの日々の生活に必要なルールは、子どもの身近にいて生活を共にする大人を通じて身につけることが重要です。また、生活に密着したルールであるため、あまり杓子定規しやくしじょうぎに守ることを強制されると窮屈きゆうくつになってしまいます。時と場合によって厳しくするが、少々間違ってもそれほど気にすることはないようなルールです。

一方、数は多くありませんが、人間である以上、どんなことがあっても守らなければならぬ原理・原則となるルールがあります。その代表が人の命や権利（人権）にかかわることです。これは子どもに対して、明確かつ厳格な言葉と態度によって教えるべきルールです。



たからです。

そのため、このような誤解を解き、各家庭独自の役割分担を考えるヒントにしたい。ただのために、わが家の役割分担の根拠についてももう少し述べておきます。

(II) 右往左往した二、三十代



ただし、日常生活上のルールと異なり、このようなルールの存在を子どもに実感させる機会はそう多くありません。そのため、普段子どもと接していない大人でも担うことができます。むしろ、たまにはあっても、この人のいうことは絶対守らなければならぬ、と子どもが感じ取るようになれば成功です。

もうおわかりだと思えます。わが家の役割分担は、母親だから身近な生活ルール、父親だから原理・原則というではありません。私が家において、妻が外で働いていれば、互いの役割は変わっていったでしょう。

実際に、私が家庭で仕事をするようになって一番驚いたことは、いつのまにか子どもの態度や言葉遣いに対して、細々と口うるさく注文をつける自分を発見したことです。

(I) 右往左往した二、三十代

前節で、私が父親として子どもに対して責任をもっているのは人の命や権利に関すること。

それはどんな場合も守るべき原理・原則であり、明確かつ厳格な言葉と態度で教えるべきである、と述べました。

しかし、これを読んで、さすがは大学の先生、さぞ立派な父親として、子どもに命の尊さや人権について教えているのである、と理解されたとすれば大いなる誤解です。現実はそのような甘いものではありませんでした。

多分、四十代後半の現在の私なら、そし

て大学生になった長男に対してなら、それなりの言葉で話すことができると思いますが。しかし、仕事との狭間<sup>はざま</sup>で父親のあり方がわからず右往左往した二十代から三十代にかけての私に、そんな力も余裕ありませんでした。

むしろ、私の父親論は、父親になりきれないわがまま息子が、子どもたちによって親として育てられる過程をまとめたもの、といったほうが正しいでしょう。

第二部を「新しい親子の世界」と名づけた理由です。

とりわけ、人の命や権利にかかわるルールを教えてくれたのは長男と長女、学んだのは私のほうでした。

それは長女が小学生になった年のことでした。

「今日ね、Aちゃんと友だちになったの。Aちゃん、車いすにのってんだよ」

小学校で行われた養護学校の子どもたちとの交流活動の話でした。私は目を輝かせて何のこだわりもなく話す長女に笑顔で応えながら、長男との苦い経験を思い出しました。

私が住む地域には総合病院や養護学校があり、車いすで行き来する人たちと路上で出会う機会が多くあります。

まだ小学校に入学する前の長男と二人で散歩しているときでした。車いすで来る人を見た長男が、突然その人を揶揄<sup>やゆ</sup>する言葉をつぶやいたのです。

私は一瞬とまどい、あわてて叱りつけました。でもそれ以上、六歳の子どもに語りかける言葉を見いだせませんでした。

自分とは異なる人に関心をもった子どもに、その人と違和感(差別感)なく交わる(コミュニケーション)手本を示すことができるかどうか。これが親が担うべき人権教育の基本です。

でも私はできませんでした。

長男の言葉へのとまどいは差別的表現よりも、差別される世界にかかわることを避けてきた私の心と態度があらわにされたことから生じたものでした。その私が父親として人の権利を息子に教えるためにいかに変わったか。

## (12)「異質」との交わりが成長の契機

「正直に言えば、初めてここに来て患者さんを見たときは、思わず目を閉じそうになるほど怖く感じて、言葉もでませんでした」

これは静岡県ボランティア協会が毎年夏休みに主催するサマーショート・ボランティアの報告書の中の一節です。この活動に初めて参加した女子高校生の体験を綴ったものです。

前節で、車いすの人に向けた長男の言葉が、父親の私こそ、障害をもつ人との交流を妨げる壁をもっていることを自覚させてくれたことを紹介しました。しかし問題はここからです。どうすればこの私の思いを長男に伝えられるか。小学校入学前の子どもに、言葉のみでは困難だからです。

その答えを教えてくれたのが、先に紹介した女子高校生の体験でした。彼女のレポ

ートは、ハンディをもつ人たちが積極的に「生きる」ことに挑戦する姿に、彼女自身が「生きる」意味を学ぶことができたことへの感謝の言葉で終わっていました。

彼女以外にも、おじいさんやおばあさんとの交わりで「ありがとう」の言葉を発見した中学生。子どもたちから笑顔の心を教えてもらった高校生。施設で働く看護婦や職員の人たちから仕事の意味と責任、そして人としての強さと優しさを学んだ大学生。このような体験レポートで報告書はいっぱいでした。

ヒトは人間として生まれるのではなく、



人間として育つといわれます。そのことを象徴するのが人間という漢字です。人と人の間にあつてはじめて人間であり、さまざまな人との出会いこそ、ヒトを人間に成長させる場であることを意味する漢字です。

それは、異質な人、違和感を感じる人との交わりこそ、最も豊かな人間形成の契機であることを示唆しています。

このように考えるとき、異質な他者と自分との間にある壁を自覚したときこそが、さまざまな人と共に生きることが出来る人間としての力を育てるチャンスではないでしょうか。壁があること自体が問題ではなく、壁の存在を知らないままに育つことこそ問題です。

前節で紹介したように、長男が入学した小学校では隣接する養護学校との間で交流教育を実施しています。一年生になった長男が、そこで出会ったS君と、私ではできなかったハンディをもつ友との新たな<sup>あいだ</sup>“人の間づくり”への道を歩んでいることに気づくのに、それほど時間はかかりませんでした。

### (13) 父親の姿が見えていますか

「アレッ！ お父さんがいる。ひさしぶりだね」

長男が小学校四年のときでした。私が大きなイベントのプロデュースを引き受け、半年以上にわたり帰宅が明け方という時期がありました。

そのイベントが終わり、久しぶりにわが家で家族と一緒に食事をしようと思い、食卓についたときに長男から出た言葉でした。

私のほうは毎晩（朝？）子どもたちの寝顔を見てから布団の中に入っていました。そのため、それほど離れていたという実感がありませんでした。

しかし、それはあくまで私の勝手な解釈であつたようです。静かに寝ることが出来るようにと、妻が私の寝床に子どもたちを近づけなかったことも重なり、私の姿を見ることがなかった長男にとっては当然の言葉でした。

からです。

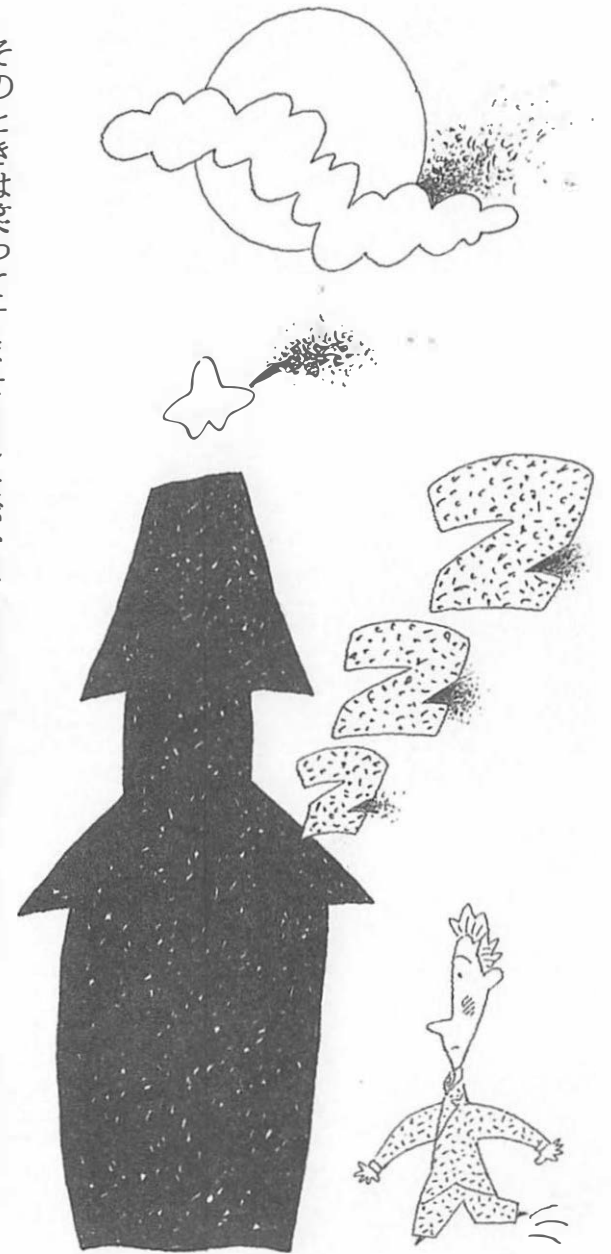
実は私の父は、私が中学校に入学する直前の三月、戦地で患った病やまいの再発が原因で亡くなりました。思春期真っ盛りで、最も父親が必要なときでした。

でも私は父がないことをほとんど意識することはありませんでした。思春期ゆえの衝動にとまどう私に、父は人としてのあり方を示すモデルになってくれました。

母の言葉や行動や価値観の中に、父の姿を見いだすことができたからです。

それは、この年になってふりかえってみれば、多分に母の理想とする父親像であったと思います。しかし、たとえそうであっても、母の思いを介した父の姿を信じられたのは、どんなに遅くなっても父が帰るまで食事をしなかった母の厳しさと、帰ってくれば必ず私を膝の上に置いて頬ずりをしてくれた父の優しさが、私の心の芯しんに刻まれているからだと考えます。

これまで父親としての子どもへのかかわり方について、私自身の経験をもとに述べてきました。でも、読者の中にはさまざまな事情で子どもと共に過ごす時間がとれない



い方も多いと思います。

しかし、問題は物理的に見えないことではありません。私が失敗したように、それが子どもの心の中から父の姿を消してしまうことにつながるかどうかです。

そこで長男の言葉を契機に、私たち夫婦がどんな工夫をしたかを次に紹介します。

#### (14)子どもとの「距離」を短くする工夫を

わが家の居間兼食堂には一辺百二十センチの正方形の食卓が置かれています。非常に頑丈なつくりで、真ん中に調理器具が収められたものです。夫婦で静岡市内のデパートすべての家具売り場を回り見つけました。

この食卓には、頑丈なだけが取りえの二人用の椅子一脚と一人用二脚が、セットでついていました。これに加えて、人間工学に基づき加工された背もたれ付きの椅子とひじ掛け付きの椅子を買いました。

頑丈な椅子は子どもたち、背もたれ付きは妻、ひじ掛け付きは私の椅子にするためでした。

前節で、半年ぶりに家族と食事をしようとした私に向けられた長男の「ひさしぶりだね」という言葉を契機に、どんなに忙しくても子どもの中の心の中から父親の姿を消してはならないと反省したことを述べました。その結果行った工夫が食卓と椅子の購入でした。理由は二つあります。

一つは食卓を一般的な長方形ではなく正方形にしたことです。正方形であれば子どもどもたちとの距離が短くなり、家族六人全員が料理と一緒に囲んで食べることできるからです。

もう一つは、ひじ掛けの付いた通称「お父さんの椅子」の誕生です。あえて子どものより高級(?)な椅子にしたのは、自分たちを支える父親の位置を明確にするためでした。たとえ食事のときに父親がいなくても、その存在が椅子を通して子どもたちの心に意識されることを願ったからです。



しっかりした聖一君、  
優しい優子さん、  
かっこいい光二君、  
かわいい貴子ちゃん、

(15)願いを形容詞に託して

らうちの家族ほどお父さんやお母さんと話をする家族はないね、といわれたときに、間違っていないかと思いました。そして、子どもが寝静まったあと、夏はビール、冬は熱燗を飲みながら、子どもたちのことについて互いの経験と意思をもとに語り合う夫婦の習慣が、この椅子と食卓とともに根づいたことも紹介しておきます。



ただし、現実それほど甘くはありませんでした。私のほうは父の威厳の象徴としてひじ掛け椅子を用意したつもりでしたが、子どもたちはもつとしたかでした。威厳よりも座り心地のよさに魅力を感じた様子。そのため問題は私がいなくときにだれが座るかでした。結局は兄の権力(暴力?)が私の威厳より優先されたようでした。その様子を妻から聞き安心しました。この椅子が、長男にとって父を超える踏み台になることを密かに願っていたからです。実際にどれほどの食卓と椅子が役立ったかわかりません。でも、ある日、長女か

新年おめでとうございます。  
お父さんは隣の国の中国にいます。  
今年目標を互いに教え合って出発できることを願っています。

これは私が静岡県青年の船の講師として中国の青島チンタオを訪問した際に、四人の子どもたちに送った年賀電報の内容です。昭和六十一年（一九八六）の正月のことでした。初めての外国旅行、それも元旦を挟んでの一週間の船旅。すべて初体験で緊張の連続でしたが、その中の楽しい思い出がこの年賀状です。理由は二つです。

その一つは、子どもたちへの年賀状はこれだけだからです。読者の皆さんの中にあっても、自分の子どもに年賀状を出した経験のある方はそう多くないと思います。

新たな年の夢を一枚の葉書に託して、互いに伝え合い、人あいだの間を豊かにすることで新年を祝う営み、これが年賀状の世界ではないでしょうか。その意味で、私は船から年賀電報を出せることを聞き、家庭では言いにくい父親としての思いを子どもたちに

伝えるよい機会と考えました。

でも、いざ考え始めるとなかなかよい言葉が浮かびません。

何しろ長男が小学校四年、長女が幼稚園年長、次男が年少、次女は前年の四月に生まれたばかり。どう表現すればよいか悩みました。これが楽しい（今から思えば）思い出となった二つ目の理由です。そして悩んだ末の電文が冒頭の言葉です。

私はこのメッセージに二つの意味を含めました。

その一つは、四人の一人ひとりが、その子にしかない良さをもつかけがえのない存



在であること。親は同じでも四人は全く異なる人格であり、それぞれ自分でしか表現できない世界を創造してほしい、という思いを名前の前の形容詞に託しました。

もう一つは、矛盾するようですが、個性の違いを互いに認め合い、支え合って生きてほしい、とりわけ長男に妹や弟の面倒をしつかりみてほしい、という意味です。

長男のみが電文を読む能力がある年齢であり、長女と次男は母親を通じて教えてもらうしかなく、次女は全く意味を理解しない幼児だからです。

そして、年上が年下のモデルになり、年下が年上をあこがれ、まねる、これが子どもたちの世界の豊かさの根源と考えたからです。

## (16)正月は絶好の機会

「ベトナムの大地を豊かにうるおすメコン川に行きました。世界地図で確かめてください。大きさがわかると思います。

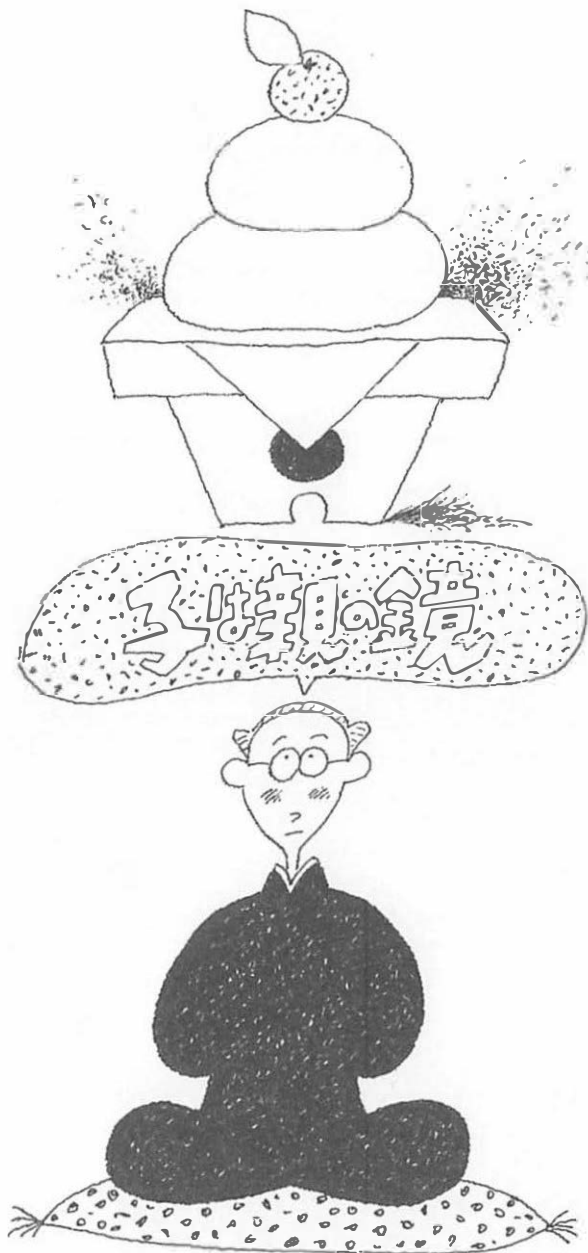
でも実際に見て驚きました。川ではなく海に近い景色でした。

日本の川はどんな大きな川も向こう岸が見えます。メコン川は川の中にある島しか見えません。観光客のために船が出ていますが、島巡りが目的です。たくさん自動車を積んだフェリーボートも、向こう岸ではなく島に向かっていきます。

これらを見ながら、日本という国がいかに小さいかがよくわかりました。何よりも、日本の中だけで考えていると、他の国の人たちに理解されない危険性があることを実感しました」

これは平成八年（一九九六）の十二月に、調査のため訪れたベトナムのホーチミン市から子どもたちにあてた便りの一部です。

前節で、中国への旅で送った子どもたちへの年賀電報を紹介しました。それから十年、小学校四年の長男は大学一年に、幼稚園年長の長女は中学三年に、年少の次男は中学一年に、生まれたばかりの次女も小学五年生になり、それぞれ自分の道を歩み始めています。父親としては嬉しさと寂しさが入り交じった複雑な気分です。



私自身は大学の寮から戻る長男と共に、四人の兄弟姉妹がそれぞれ「人として生きる」二十一世紀の日本と世界のあるべき方向を考える「時と場」をもつことから、新たな年の歩みを始めたいと願っています。

そのため、初渡航から十年を経ての年末に訪問したベトナムでの出来事を、改めて子どもへのメッセージとして伝えようと考えました。

ただし、十年前の電文には、一人ひとりの健やかな育ちを願う「父の思い」を込めました。今回は、思春期にある若者に、「少し先を生きる人が贈る言葉」として送付しました。

ところで旅は未知の世界に身を置くことにより、普段の生活を省みて新たな生き方を見いだす「場」になると思います。正月も同じではないでしょうか。来し方を顧みて行く末に夢を描く「時」だからです。

その意味で、正月は新たな親子の世界を見いだす絶好の機会です。

ただし、忘れてはならないのは、子は親の鏡であること。通信簿の成績に一喜一憂する前に、子どもの良さをどれだけ見いだし育む親であったかを省みてください。テレビゲームに没頭する子どもを叱る前に、一人の人間として誇りをもって生きる想いを語ってください。

## (17) 上がらぬ出生率、時代が求めるものは

二十一世紀まであと四年となった正月を迎えた日のことです。本来なら希望あふれる未来を語るべきですが、残念ながらそんな気分になれませんでした。理由は次の記事です。

「一九九六年に生まれた赤ちゃんは百二十万三千人で二年ぶりに増えていることが厚生省の『人口動態統計の年間推計』でわかった……しかし人口千人当たりの出生数は九・六人で、九三、九五年の最低記録と並び、出生数も九三年の百十八万八千二百八十二人に次いで三番目の低さとなり、少子化傾向は相変わらずだった」〔読売新聞〕一九九七年一月一日

問題は人口千人当たりの出生数（出生率）が上がりなかつたことです。

ちなみに、第一次ベビーブーム（団塊の世代）が始まった四七年の出生率は三四・

三、第二次ベビーブーム（団塊ジュニア）の頂点の七三年は一七・一。大人の目を逃れて子どもたちが生きる知恵を互いに学びとる近所の仲間の数が、団塊の世代の四分の一、団塊ジュニアの二分の一に減つたわけです。

そのため、少子社会での親の課題は口や手の出し方ではなく、<sup>あひだ</sup>子どもと子どもの間づくり<sup>だ</sup>と考え、わが家の四人の小さな先生から学んだことを紹介してきました。

しかし、小学校も高学年になれば気になるのは豊かな人間関係よりも学校の成績。特に受験生がいる家庭では友だちと遊ぶなんてとんでもないと考えたい方も多いのではないのでしょうか。私も例外ではありません。実は私の気分を暗くしたもう一つの原因は、中三の長女が受験生だからです。

前節で、正月休みは寮から帰った長男を含め家族で語り合おうと述べました。

しかし、やはり現実には厳しいものでした。ただし、長女のために家族一同が我慢する暗い正月……だからではありません。受験生であることを忘れ弟妹とのチャンネル争いに参加し、それに飽きたら久しぶりに家にいる天敵の長男と口ゲンカする長女の



日に繁華街で食事を終え、ほろ酔い気分  
でレストランを出たとたんに、子どもたち  
に囲まれたのです。最初は何が起こったか  
からずとまどいましたが、よく見ると何か  
を買えといっている様子。いわゆるスト  
リートチルドレンとよばれる子たちでした。  
事情がわかり改めて差し出す手を見て、  
とまどいは驚きに変わりました。その大  
きさ(小ささ?)は日本の小学校一、二年の  
生活科授業で出会った子どもと同じだっ  
たからです。  
さらに翌日、友人と市内を歩いていると、  
昨夜より少し大きい子どもがココナッツ十

明るさと勉強ギライへの困惑が原因です。

でも他方で、四人のテンヤワンヤを楽しむ父親の目があることも事実です。その理  
由は、少子化のもう一つの側面である出生総数の減少により、学歴に代わる新たな能  
力が要求されることが確実だからです。そしてその能力は、受験勉強ではなく弟妹や  
兄と争う長女の明るさのほうに関係するからです。

### (18)アジアに育つ若い力

前節で、元旦の新聞に掲載された「少子化傾向は相変わらず」との記事から、子ど  
もの減少が学歴に代わる新たな能力、それも受験生であることを忘れて弟妹や兄と争  
う長女の明るさに関係すると述べました。その理由を述べるのがここでの課題です  
が、それはベトナムでの体験に関係します。

実はベトナム初訪問は昨年六月(一九九六)のホーチミン市でした。その到着した

数個入りの籠を天秤棒で担いで笑顔で近よってきました。旅行者相手のココナッツ売りの少年です。ただし、日本なら当然小学校に行く時間。笑顔で数十キロを担ぐたくましさと年齢とのギャップに、私の子ども像は混乱状態になりました。それが友人の次の言葉で日本の子どもたちへの「危惧」に転換しました。

「十年で変わるね」

ご存じの方も多いと思いますが、ベトナムはベトナム戦争終結後も、中国やカンボジアなど、国境を接する国と戦い続けました。だが今は、ドイモイ（刷新）政策により新興工業国への坂を上っています。でも、戦争で破壊された世界の修復はそう簡単ではありません。その象徴が、私が出会った子どもたちの現実でしょう。

しかし、考えてみれば五十年前の敗戦後の日本にも多くのストリートチルドレンがいました。美空ひばりのデビュー曲の「東京キッド」はいわば日本版ストリートチルドレンの世界を歌ったものです。

しかもこの子たちこそが、二度と破壊と飢えの世界に戻りたくないとの思いで働き

続け、経済大国日本の基盤を築いた世代です。日本の高度成長時代とは、この世代の二十代～三十代の時期と重なるからです。その意味で、今日の豊かさの源は日本版ストリートチルドレンのエネルギーにあるともいえます。

同じことが、私がホーチミン市の街角で出会った、したたかで生活力にあふれたベトナムの子どもたちにもいえるでしょう。もちろん、彼ら彼女らの現状を肯定するわけではありません。しかし、彼ら彼女らがベトナム社会を飛翔させる原動力となることも否定できないと考えます。

何よりも自覚すべきは、この人たちと十年後、二十年後にアジアを舞台に競争するのが、現代日本に育つ超少子世代、すなわち私たちの子どもです。さらに、ストリートチルドレンではなくとも、アジア各国には「生きる力」にあふれた同世代が次々と育っています。

この人たちとの競争に太刀打ちできる力を、日本の受験勉強でつけることができるでしょうか。

これまで教師の仕事を優先し、わが子への手を抜かざるをえず、心配したが、かえって何でも自分でできる高校生に育ってくれました。もし仕事があれば手を出しすぎて、心配で夜十時に家にいないなんて考えられなかったと思います。息子の親離れではなく母親の自分のほうの子離れが困難だったでしょう……こんな話でした。もつとも、今ではよかったとは、以前は迷ったことを意味します。

母親、妻、教師の三役に加えて、選んだパートナーが一人息子のため、倒れた姑さんの世話を含めて、長男の嫁としての立場



(19)家族はどうかかわるか

先日、東京の出版社で、私も編集者の一人である生活科教科書の編集会議がありました。内容は子どもの自立という観点から、家族の役割をどのように表現するかというものでした。

会議終了後の夜十時頃、電車を待つホームの上で、編集仲間のA先生のつぶやきが聞こえました。

「大変だったけど教師を続けてよかったわ……」

なんのことが気になり、私はその意味を問い掛けたところ、A先生は次のようなことを語ってくれました。それは家族の役割という編集会議での内容とかわかって、教師と母親という二つの役割を高校生の息子さんとの関係でどのように悩んできたか、という話でした。



に悩み、教師を続けるかどうかで何度も迷ったようです。ちなみに、私がA先生と一緒に編集会議をした場所からA先生のお宅まで約二時間かかります。お子さんは一人息子で高校生です。

ところで、読者のなかで生活科の授業をみた方がおられるでしょうか。多分、教室を出て廊下や中庭あるいは地域の公園で元気で活動する子どもをみて、これが勉強なの、と驚くと思います。いま学校では、生活科に限らず、従来の教科書を片手に教師が教室で教える授業を少なくして、教室の外で行う活動や体験を中心にした授業を増やすために努力をしています。

なぜでしょうか。答えのヒントはA先生の言葉と前回紹介したベトナムのたくましい子どもの姿です。

教師、母親、妻、嫁と一人何役もこなすA先生のエネルギーすべてを息子さんに向けた場合を想像してください。息子さんがA先生から自立するには、大変なエネルギーが必要でしょう。でも、A先生のような生き方は少数派、日本の母親の多くは子どものために仕事をやめたと思います。他方、ベトナムの街角で観光客相手にココナッツを売る十歳前後の男の子は、既に自立（自活？）しています。むしろ、必要なのは学校の勉強とそれを可能にする親と家庭の力です。日本の子どもはどうでしょうか。教室と家庭の中は豊かでも、親と教師から離れて一人で生きる力を身につけられるでしょうか。

## (20)看板、ゴミ箱、大型遊具

静岡県教育委員会の依頼により、社会教育委員として、姫路市にある「兵庫県立子どもやかたの館」への視察旅行に参加する機会を得ました。

しかし、正直あまり気が進みませんでした。これまで、子どもや児童あるいは青少年といった言葉がついた施設を何度か訪問す

に自分で工夫して遊んでほしいからです。その三つは大型遊具がないことです。ここは自然のすべてが遊具です。自然を相手に自分で工夫して遊んでほしいからです。

長を支えるために、最も必要な視点が見事に表現されていました。

子どもの館はJR姫路駅からバスで市街地をぬけて約二十分、桜山湖畔を一望する地にある鉄筋コンクリートの建物。ただし、周りは緑豊かな自然ですが、館のほうは地肌のままのコンクリートで灰色一色。スッキリはしていますが、子どもの館というよりどこかの研究所のイメージ、というのが私の第一印象でした。

ところが、私たちを案内してくれた次長の大野さんの話を伺い、私は不明を恥じました。その代表が次の「六つのなし」というこの館のコンセプトです。

その一つは看板がないことです。あってもコンクリートの地肌に溶け込むように控えめです。行きたい場所へは、自分の五感で探してほしいからです。

その二つはゴミ箱がないことです。自分で持ってきたものは自分で持って帰る、という習慣を身につけてほしいからです。

その三つは大型遊具がないことです。ここは自然のすべてが遊具です。自然を相手に自分で工夫して遊んでほしいからです。

る機会がありました。でも、大人の勝手な思い込みばかりが目立ち、子どもが本当に求めているものに正面から応えた施設に出合えなかったからです。ところが、実際に訪問して驚きました。まさに「現在の子どもたち」の健やかな成





六つとは、①案内用の看板、②ゴミ箱、③大型遊具、人工の④色彩と⑤音、⑥自動販売機のこと。いずれも子どもの豊かな育ちには不必要というわけです。

私はこのコンセプトに賛同しました。でも、これまでの経験から、子どもはともかく親が耐えられるかどうか心配になりました。

このような私の気持ちを察してか、館の次長の大野さんは次のように話してくれました。

「来館者の中には、何もない、と不満を述べる方もおられます。その都度、わたしど

その四つは色がないことです。四季折々の自然の変化を感じ取り、自分で色をつけてほしいからです。

その五つは音がないことです。ただし、ないのは人工の音です。森の中の小鳥の鳴き声や風の音もってくる自然の豊かさを体験してほしいからです。

その六つは、自動販売機がないことです。安易にお金に頼るのではなく、前もって用意する気配りをもってほしいからです。

私は感動しました。この「六つのなし」こそ、常に大人の用意した世界の中で生きなければならぬ現代の子どもにとって、最高の環境だと思ったからです。

でもそれだけに心配になりました。子どもよりも親のほうに耐えられるかを。

## ②仲間づくり、ストレス発散の効用も

前節で、兵庫県立子どもの館のコンセプト「六つのなし」を紹介しました。

もはこの「六つのなし」の意義についての話をさせていただきます。なにもない、どうすればよいかわからない、そこから子どもの育ちが始まり、自分の足と目と声で目的地にたどりつく体験をもつてほしいからです。

もつとも、問いかけてくるのはお父さんやお母さんのほうです。どうも体験的な活動が必要なのは子どもだけではないようです」

この話を伺って私は改めて感動しました。子どもの豊かな育ちの最大のポイント（障害？）は親のあり方にあるとして、そのための「親育ちの場」となることが、この館の隠れた最も重要なコンセプトであることに気づいたからです。

このことと関連して、もう一つ気づいたことを紹介します。館の中で大型遊び器具が唯一置かれている場である乳幼児のための部屋を訪れた際のことです。

この部屋では、幼稚園にあがる前の年代の幼児が絨毯じゅうたんの上で寝ころがったり、室内用のブランコや滑り台にしがみついたり、はい上がったり、ころがりおちたりしていました。

ただし、紹介したいのはこの元気な子どもたちではありません。子どもたちの側そばでおしゃべりをしているお母さん方の笑顔です。いずれも二十代半ばの若いお母さんでした。

どうもこの部屋の役割は子どもの遊び場だけではないようです。若いお母さん方が互いに子育てを練習し合う場になっているようです。また、初めてのお子さんの子育てで積みも積もったストレスを一気に吹き飛ばす場でもあるようです。そして、何よりも大事なものは、親の仲間づくりの場になっていることです。

育つためのモデルが必要なのは、子どもよりも初めての子育てでとまどう親のほうではないでしょうか。

## (22)「総合性」「創造性」「自主性」

改めて、学校の勉強と子どもの育ちについて考えてみたいと思います。

実は、研究者としての私が最も関心をもっているのは、現在の学校教育の内容や仕組みが二十一世紀を生きる子どもたちにふさわしいものなのかどうかということです。その理由の一つが、親のあり方です。早ければ入園前、遅くとも小学校の中学年になれば、学校の成績を中心に子どもの成長を考える方が多くなるからです。これまで紹介してきたように、私がベトナムの子どもたちのたくましさや、子どもの館の様子に関心をもったのも、実はこのことが気になっていたのでした。

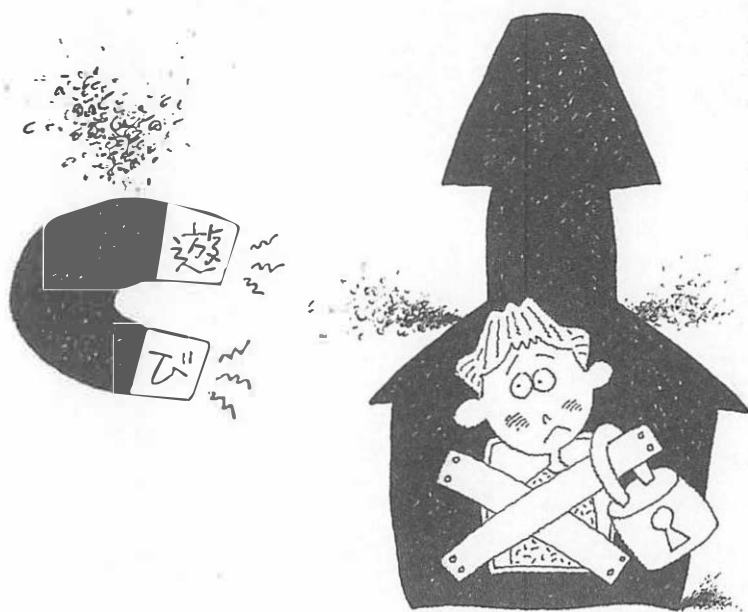
もちろん、これは二十一世紀には学校が必要ない、ということではありません。現在のままの学校教育では、子どもが一人の人間として生きるために必要な力を培うためには不十分だということです。もともと、学校はそのようなことを目的につくられたのではない、といったほうが正確かもしれません。

そのことを最も適切に表現するのが、「よく遊び、よく学べ」や「子どもは遊びの天才」という諺ことわざです。子どもの健やかな成長にとって、「遊び」と「勉強」の価値は同じということです。むしろ、語順を考えれば、「遊び」のほうが重要という意味が

含まれているのかもしれませんが。少なくとも、学校は「勉強」を専門に担当することを目的につくられました。「遊び」は学校の外の世界が担うことが前提でした。

しかし、もし家庭が学校の成績中心に子どもの成長を考えるようになればどうなるでしょうか。「遊び」によってしか身につけられない力を、子どもは失うことになりまます。私はその力を「総合性」「創造性」「自主性」「共同性」といった言葉で表現しています。

たとえば、子どもは遊ぶために自分の力を全力で発揮します。さまざまな機会に教



えられ身につけた知識や技能を、生きて働く力として「総合し表現する」のが遊びの世界です。

また、子どもは遊びに必要なものは何とか手に入れ、遊びを妨げる問題は必死に解決しようとしています。遊びは、子どもが必要に応じて新たな力を自ら生み出し、個性に即して独自の文化を「創造する世界」です。

さらに、「楽しさ」のない遊びはありません。もちろん遊びの常としてケンカや失敗や涙もあります。でも、このような友との交わりこそ、心の豊かさの源です。そしてそのいずれもが強制ではなく、子どもが互いに自ら進んで取り組むゆえに生じることです。遊びの「楽しさ」こそ「自主性」と「共同性」の源です。

### (23)親のネットワークから

先日ある講演会で、前節で紹介した遊びの価値について話したところ、次のような

質問を受けました。

「先生のいうことはわかりませんが、近所に友だちがいないせいか、うちの子はテレビゲームばかりしていて外で遊びません。どうすればいいのでしょうか」

確かに問題は価値ではなく実際に遊ぶことができるかどうかです。ではどのような条件が遊びには必要でしょうか。

まず、遊びには大人の目を逃れて、子どもが互いに身体全体を懸命に使って表現し合う仲間と機会（時間）と場（空間）が必要です。また、子どもの生きる場は、大人と異なり、家庭と家庭の間に広がる身近な地域社会です。そのため、この「仲間、空間、時間」という「三つの間」を子どもの成長に応じて、家庭から地域社会へと、いかに広げるかが、遊びを豊かにするためのポイントです。

ただし、遊びの命は「楽しさ」です。むやみにテレビゲームを禁止して、外での遊びを強制しても、遊びではなくなりません。

問題は子どもではなく親のほうです。ゲーム機を離さない子どもを心配する前に、

物や仕事の行き帰りに出会う近所の人たちに笑顔で声をかけてください。子どもの仲間は親のネットワークの広がりとともに生まれます。

子育ての仲間や先輩や後輩とその子どもたちこそ、わが子の遊び仲間のネットワークになるはずだからです。

また、休みの日には子どもといっしょに地域を歩いてください。その途中で、お子さんに、どこで、だれと、どんな遊びをしているかを聞いてください。親としてなすべきことが見えてくるはずです。

きれいな公園よりも、路地裏や空き地こそ子どもの遊びの世界です。その候補地が見つからなければ、歩行者天国のように、曜日と時間を限って地域の道路の一部を子どもの遊び場に開放するアイデアを地域活動で提案してみてください。

さらに、テレビゲームでは味わえない、心と身体の手すべてを使うことで初めて感得できる遊びの世界の醍醐味を、子どもと同じ目の高さで語り合ってください。これが少し(?)先を生きる人生の先輩としての親の最も重要な役割と考えます。



親としてどれだけ豊かな人間関係を身近な地域で培っているかを省みてください。

近所に子どもの友がいないことを嘆く前に、子育てセミナーや家庭教育学級、あるいはPTAや子ども会など子どもとかかわる地域での活動に参加してください。買い

## (24) 学歴社会と日本型経営が崩壊へ

読者の中には、お子さんと共に小学校への入学準備をしながら、入学式を希望あふれる思いで待たれている方もおられると思います。

その思いに水をさすようで申しわけないのですが、私の四人の子どもとの経験では、それほど単純ではないと思います。入学早々の頃は元気で通学してくれば、であったのが、だんだんと成績が気になり、そろそろ塾に、と悩んでいるご家庭も多いのではないのでしょうか。実は最近、講演で受ける最も多い質問は次のようなものです。

「先生、近所の子どもがみんな塾にいつているのですけど、塾へいかせたほうがよいのでしょうか」

私は次のように答えます。

「子どもが勉強に向いているなら、塾も一つの選択です。でもそのことで失われる世

界があることを忘れないでください」

子どもの成長に必要な世界という視点からみれば、学校も塾も同じです。教師が、教科書を、教室で教える“世界だからです。”

塾に通えば、そこで勉強した分、教科書に書かれた知識を理解（記憶）する時間は増えますが、しかしその代わり、“子どもたちが、多様な場で、自ら学びとる世界”が減ります。前々回紹介した「遊び」の世界で培われる総合性、創造性、主体性といった力が身につけにくくなるわけです。そして、現在の子どもたちが生きる未来が要求するのは、この「遊び」の世界の力です。

理由は、これまで何度か取り上げてきたように、子どもたちの数が極端に減少しているからです。

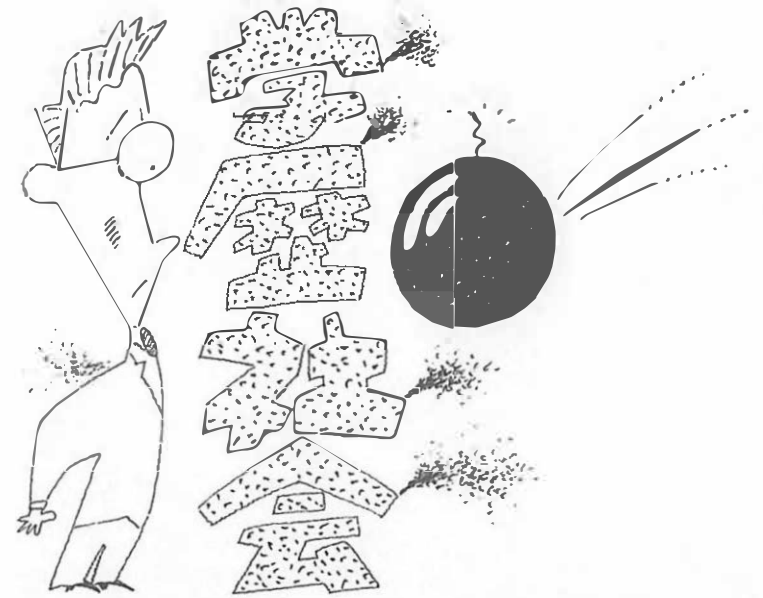
お子さんが小学生であれば、空いている教室が増えていることをご存じでしょう。子どもがいなくて廃園になった幼稚園を知っている方もおられるはずです。既に少子化の波は小学校から中学校に及び、やがて高校から大学に進みます。



齢化とセットです。今度はお父さんの世界の問題です。中高年の増加で、終身雇用と年功賃金に代表される日本型経営システムが破綻し、能力給（年俸制）による人事・給与体系に転換せざるをえなくなります。若いときは安い給料で働き、年とともに職階も上がり、それとともに給料も上がる、という仕組みは、若い人が多く年配者が少ない、というピラミッド型人口構造でのみ可能だからです。中年のリストラが要求される理由です。

そしてそれは日本の学歴社会が崩れることでもあります。考えてみてください。終身雇用だからこそ卒業後に入る企業のランクと結びついた大学が重要なのではないのでしょうか。多少犠牲を払っても銘柄大学に入学できれば人生が保障されるからです。その前提が崩れてくるのです。入学率アップも日本型経営システムの転換も二〇〇九年に突然生じるわけではありません。大学受験をゴールにおいて、教師が教室で教科書を教える授業が子どもたちの未来に何をもたらすかを問い直してください。

少なくとも、十代の一時期に、それもペーパーテストによる知識の記憶量を非常に



リクルートによる進路動向予測では、このままでは二〇〇九年に全員入学できる時代になるとのことです。十八歳になった受験希望者の数と大学定員の数が同じになるわけです。そして、二〇〇九年に十八歳になる大学受験者とは現在の小学生です。さらに、それまで、十八歳の人口は減少し続けます。当然、入学率は毎年確実にアップします。加えて、生き残りをかけた大学改革により、大学の定員はむしろ増加傾向にあります。全入時代はより早まる可能性があります。

他方、少子化はいうまでもなく人口の高

短い時間で競争して勝利する能力のみで、毎年新たな査定が要求される能力給のシステムにおいて希望の職場と収入を得ることは不可能でしょう。

### (25) 大きな理想に生きる豊かな時間を

最近、少子化の問題を研究していて気になるのは、塾産業からのダイレクトメールや電話勧誘があまりにも多いことです。いよいよ生き残りをかけた競争が激しくなってきたようです。ある雑誌に、生徒が千人以上いる塾が年間二十から三十社のペースで倒産する、との予想が出ていました。

でも、塾に行かなければ遅れるのでは、と不安に思っている方はまだ多いと思います。大都市では小学校四年から塾通いが常識、ということ友人のジャーナリストに聞きました。

私は憂鬱な気分になりました。早期受験準備↓有名中学・高校↓銘柄大学↓銘柄職

場↓生涯保証という図式を信じての塾通いであれば、明らかに間違いだからです。

理由は前節で述べました。銘柄大学入学と結びついた終身雇用十年功賃金制度は子どもが多い二十世紀型。高齢者が多い二十一世紀は契約雇用+能力給中心に変わらざるをえません。

能力給で重要なのは、次々と新たな課題に挑戦する意欲と、その解決能力(個性)を積極的にアピールできること。ひたすら黙ってペーパーテストに挑むために鍛えた能力はマイナスに働く可能性があります。

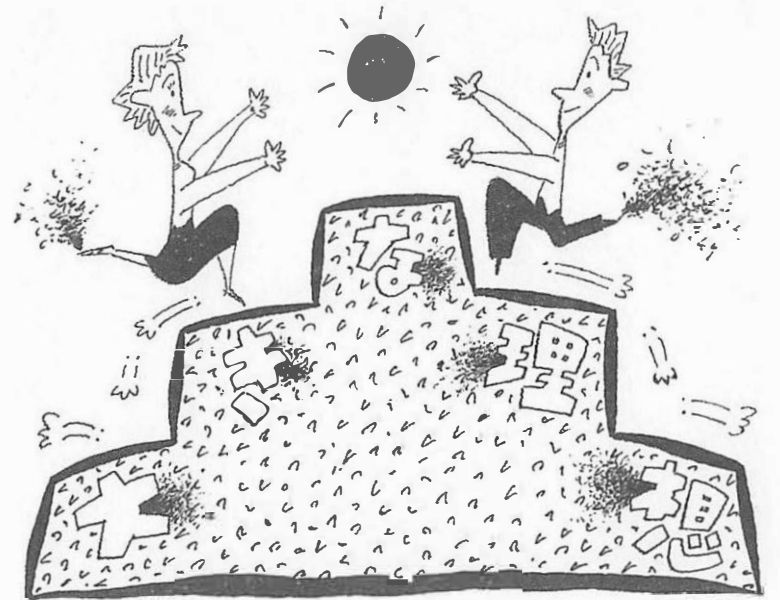
時間をかけても独自のものを創造し、だれもが理解できるように表現する。どんな世界に行っても自分なりに生きることができ、だれとでも仲良くなれる。これが二十世紀の社会で評価される能力です。もう既にその変化は始まっています。

これからは大競争時代(メガコンペティションエイジ)といわれています。世界とりわけアジア各国が日本のライバルです。舞台は国の外、日本の学校での成績が通用しない社会です。異文化の人たちとの交渉で最も大事なものは自分の考えを明確に表現で

きること。失敗しても負けずに次々と明るく挑戦できる人が生き残れます。

他方で人を憂える心と多様な人とともに生きる力、特に介護能力が大事です。日本は世界に類のない高齢社会になるからです。いずれも学校や塾が最も不得手とする能力の育成です。親の出番です。まず、一人の人間として、自分の目と耳で社会の変化を見据えて、未来からの使者の可能性を過去の基準で判断していかないかを省みてください。

そして、子どものほうではなく、親としての生き方を問い直してください。受験能



力は学校や塾の領域ですが、人間としての能力は命を与えた男女の責任です。それは言葉ではなく、自らの生き方で示すしかないと考えます。

子どもの幸せを願わない親はいないでしょう。でも、それがわが子のみの幸せなのか、他の子どもたちと共に生きる望みなのかを考えてください。学歴や企業のランクではなく、人としてどれだけ誇りある生き方をしているかが最も重要です。

仕事を一生懸命することは大事です。でもそれが何のためかを子どもに伝えることを忘れないでください。仕事や生活の必要を超えて、より大きな理想のために生きる豊かな時間を創造してください。その懸命に生きる親の姿こそ、子どもが未来を生きる力を学びとる最も優れた機会であることを記して、結びの言葉とします。

〈参考文献〉

- 阿藤 誠編『先進諸国の人口問題―少子化と家族政策』東京大学出版会  
馬居政幸著『なぜ子どもは「少年ジャンプ」が好きなのか』明治図書  
馬居政幸・西田公昭監修『「未来の静岡県をみつめて」若者たちは今 調査結果報告書』静岡県女性総合センター  
大橋照枝著『未婚化の社会学』日本放送出版協会  
大淵寛著『少子化時代の日本経済』日本放送出版協会  
落合恵美子著『21世紀家族へ』有斐閣  
小宮山洋子著『家族からはじめる豊かな社会』青英舎  
佐和隆光著『豊かさのゆくえ』岩波書店  
角替弘志・馬居政幸編著『地域における生涯学習の課題』静岡県出版文化会  
林 道義著『父性の復権』中央公論社  
深谷昌志著『子どもの生活史』黎明書房

あとがき

私は昭和五十四年（一九七九）に二十九歳で静岡大学に赴任しました。最初の一年は妻が埼玉県の高校教師だったため、単身赴任でした。長男が三歳になる直前の頃です。

「三つ子の魂、百まで」といわれるように、この時期の父親の不在はマイナスとされます。でも、私はこの年に四人の子の父親として生きる基盤を培えたと考えています。単身赴任だからこそ、父である醍醐味を長男に教わることができたからです。

それは、赴任一か月を経て、久しぶりに家族に会うため、新幹線、山の手線、私鉄と乗り継いで着いた埼玉県郊外にある駅を出た途端に生じた出来事でした。「オートチャーン」と叫びながら、妻の運転する車の窓から身体を精一杯突き出して手をふる

長男の姿が、私の目と耳に飛び込んできたのです。この瞬間、それまでの二十九年の人生で全く経験したことのない心の動きが沸き上がるのを止められませんでした。それは、一人っ子として人に何かをもらうことを当たり前として育った私が、人のために生きることがより深い感動を生むということを初めて感得した瞬間でした。

いかに自分の時間とエネルギーがとられようとも、そのこと自体が喜びにかわる。親として与えることより、子どもからもらうことがいかに多いか。人の創造にかかわれる喜びと感動の豊かさこそ、親として生きるエネルギーの源泉であること。

こんな父親としての心の経験を、静岡と埼玉を毎週往復する私に長男は与えてくれました。そして今も、四人の子どもたちから私はもらい続けています。その意味で、本書は私の単著ではなく、妻と四人の子どもたちとの共著です。加えて、生後二か月目から長男を預かってくれるとともに、未熟な夫婦に親となる心と技術を教えてくれた木村圭子さんを始めとして、私たち家族と「育ちの時間と空間」を共有してくれた多くの先輩の皆様との共著であることを述べて、感謝の意とさせていただきます。

さらに、このような私と家族の経験を文字に表現する勇氣を持てたのは、静岡県教育委員会社会教育課が主催する家庭教育充実事業企画推進委員会の委員として、県内の数多くのお母さんやお父さんから、その智慧を直接学ぶことができたからです。また、静岡大学に赴任して以来、この委員をはじめ静岡県内の教育と行政の現場で学ぶ機会を次々と用意してくれた静岡大学教育学部長の角替弘志先生、同様に角替先生の推薦とはいえ三十すぎの若僧を委員に受け入れて研究者に育ててくれた北條博厚委員長（静岡県立子ども病院院長）や宮澤宏社会教育課長（現焼津市教育長）、あるいは指導主事の山田象三先生（現日本教育新聞静岡支局顧問）や成岡桂三先生（現志太幼稚園副園長）を始めとする代々の委員ならびに社会教育課の皆さん、さらには男女共同参画の視点から家庭教育の課題を教えていただいた静岡県女性総合センター所長の林のぶ先生と男女が共に創るしずおか推進懇話会座長の錦織淑子先生に心から感謝いたします。さらに、より広く深い視野から子どもと親の課題を学ぶ機会を与えていただいた明日の家庭教育研究会（文部省婦人教育課）の渡邊秀樹座長（慶応義塾大学教授）や大西

●著者紹介

馬居政幸 (うまい・まさゆき)

1949年、徳島県に生まれる。東京教育大学大学院博士課程教育学研究科中退。教育社会学専攻。現在、静岡大学教授。

著書に、『なぜ子どもは「少年ジャンプ」が好きなのか』(明治図書)、『地域における生涯学習の課題』(共編著 静岡県出版文化会)などがある。現在、「アジアをどう教えるか」を『現代教育科学』(明治図書)に連載中。他に、文部省明日の家庭教育研究会委員、静岡県社会教育委員、静岡市総合計画策定専門委員をはじめ各種委員として活躍中。

灯台ブックス 113

少子時代の親子の世界

平成9年9月30日 初版第1刷発行

著者◎ 馬居政幸

発行者 多田省吾

発行所 株式会社 第三文明社

〒160 東京都新宿区三栄町9-3

電話 03 (5269) 7141 (代)

振替 00150-3-117823

印刷所 株式会社 厚徳社

製本所 株式会社 豊文社

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

1997 Printed in Japan

ISBN 4-476-02113-1

珠枝課長を始めとする委員ならびに婦人教育課の皆さんに御礼申し上げます。

なお、本書の第一部は、「教育総研／『パムの会』事務局」が主催する「パム子育て講演会」で、平成六年（一九九四）五月に「なぜなぜもてる マンガ考現学」と題して行った私の講演の記録を基に加筆したものです。また第二部は、昨年九月から今年四月にかけて、「聖教新聞」の教育欄に「少子時代の『親育ち』学」と題して週一回のペースで連載したものを再構成したものです。怠惰な私が「少子時代」の視点から本書を短期間にまとめられたのは、この二つの機会を与えてくれた教育総研と聖教新聞社のご配慮と応援していただいた読者の皆様の力によるものです。このことを記して感謝の言葉とさせていただきます。

最後に、このような構成で本書を出版することができたのは、全て第三文明社の秋田谷幸雄氏のご尽力によるものです。心から御礼申し上げます。

平成九年八月二十五日

馬居 政幸